

竹内道之助訳

クローニン全集

20

ユダの樹

三笠書房

クローニン全集

20

ユダの樹

Imaje

一九六六年 五月三十一日 第一版刊行

定価四八〇円

訳者 竹内道之助

刊行者 竹内富子

発行所 株式会社 三笠書房

東京都千代田区神田神保町一ノ四六
電話 東京(二九三)九六〇四番
振替口座 東京二二〇九六番

落丁・乱丁は本社またはお買い求めの書店でお取替えます

日放印刷・三進製本

©Printed in Japan

目次

ユダの樹

第一部・・・・・・・・・・五

第二部・・・・・・・・・・七

第三部・・・・・・・・・・五

解説・・・・・・・・・・三

装
幀
藤
岡
光
一

ユダの樹

第一部

第一章

秋晴れの美しい朝だったので、マレーは念のため、窓の外においてある電気抵抗器^{レジスタ}のついた寒暖計をのぞいてみてから、寢室のバルコニーで朝食をとることにした。ゆうべはよく眠った。ながいこと不眠症に悩んでいるものにとつて、六時間の睡眠は、まずこれならばといえる成績だった。陽光が彼の着ているゆるやかな絹の部屋着を通し温かかったし、アルトゥロは例のごとく朝の膳を申し分なく用意してあった。マレーは、いつものトスカニーニ好みのコーヒーを注ぎ——これは銀製の魔法瓶に入れて熱くしてあった——出来たてのクロワッサン^{クロワッサン}（^{三日月が}法に）に、山でとれる蜂蜜をぬったが、さて今朝は何が発見できるかと、いかにも豊かな占有の喜びをこめて、目をあたりにさまよわせた、ああ、なんとという美しさだらう！ 一方には、青空に聳え立つライスペルクの山が、軽く胡椒^{しじふ}でも撒いたように、小さく古風な赤屋根の農家^{農家}を点在させた、したたるばかりの緑の牧場の上に、神の

御手^{みで}になるかと思えるほど、均斉のとれた姿をみせている。また他方には、エッシエンブリュックのゆるやかな斜面が、梨や杏や桜^{あんず}の果樹園をなして望まれる。そして前方、南に面しては、遠く雪をいただくアルプスの尾根をのぞみ、その下方、さよう、彼の所有地である高原の下方には、シュワンゼー^{（白鳥の湖）}の山湖が横たわっていた。それは何ともいえぬ美しい湖で、その変幻きわまりないおもむきは、あるときはにわかに荒れ狂い、野性的な驚くべき姿を呈するかとおもえば、また今朝のように、あわい霧につつまれて、おだやかにほの明るく輝きながら横たわることもあるが、その霧をやぶっていま小さな白いボートが一隻、静かに音もなくすべってきた。それはまるで……そうだ、まるで白鳥のようだ、と彼は詩人になったつもりで形容せずにはいられなかった。ながいこと探しあぐねたすえ、幸運にも、このおだやかで美しい土地を見つけたのだが、観光客にもまだ汚されず、それでいてメルスペルクの町には近く、したがって能率のいい文化的な社会のあらゆる利点をも享受できるのである。それにこの家だが、スイスのある有名な建築家の綿密な設計によって建てただけあって、これまた

彼の理想通りのものであった。人目をひくというより、むしろ堅実というべきだろうが、とにかく屋内の設備は申し分なく快適にできあがっていた。燃料油をつかう暖房装置、造りつけの食器棚、タイル張りの台所、蒐集した絵をかざる立派な細長いサロン、それに長かったアメリカ生活のおかげで、欠くことのできないものになったモダンなバス・ルームまであるのだ。いつもボンヌ・ブーシー（最後の美味として）にとっておくオレンジ・ジュースを飲みながら、みちたりた溜息がマレーの口からもれた。それほど彼の気分はさわやかで快く、さし迫っている不幸など、全く気づきもしなかったのである。

さて、きょう一日、どうすごしたのか。椅子を立て着がえをしながらか、彼はあれこれと可能な日程を頭に描いた。フォン・アルティスホーファー夫人に電話をして、トイフエンタールのほうへでも散歩をしようか——こんな朝には夫人はきっと、あの妙なかつこうをした、みごとにワイマール犬どもに、運動をさせたがっていることだろう。いや、それよりも、五時には祝祭日のパーティに、彼女をつれて行くという、うれしい約束がしてあったつけ——だから、あまりしつこくしてはいけないでは、どうしよう。メルスブルクに行つて、ゴルフでもやるか。それとも、ボートを出して、もう湖上でフェル

ヒエン（ワカサギに似たサケ科の淡水魚）のかかるのを待っている、漁師たちの仲間入りをするか。しかし、気持としては、なにかもつとおとなしい気ばらしのほうが望ましかったので、とうとう彼は、晩霜（おそしも）の害をうけて、この夏満足に花を咲かせなかった薔薇園（ばらぞう）を見に行くことにした。

階下へおりて、屋根のあるテラスへ出た。長椅子のわきに、けさの郵便や地方新聞がおいであつた——英国の新聞やパリの『ヘラルド・トリビューン』は、午後にならなければ届かないのである。手紙類には、彼の気持をみだすようなものは、一通もなかったが、そのおののを妙なためらいをみせながら、いやいや親指で開封したもの——このばかげた恐怖症は、いつまで自分にこびりついているのか、実にふしぎだと思つた。台所では、アルトウロが歌つていた。

ラドンナ・エ・モビレ……
La donna è mobile……
（かぜのなかの……）
センプレ un amabile……
Sempre un amabile……
はねのように……
ラドンナ・エ・モビレ……
La donna è mobile……
いつもかわる……
エ・センプレ misero……
E sempre misero……
おんな（ごころ）

マレーは微笑した。彼の執事（バウワウ）は、仕方のないオペラ歌手気取りなのだ——名指揮者トスカニーニが、かつてメ

レスブルクを訪れた際、お気に召したコーヒーのブレンド(コーヒー豆の混合法)をくふうしたのが、ほかならぬアルトウロだった——が、陽気で仕事好きで忠実な男だし、またその細君のエレーナは、図体が途方もなく大きく、いくぶん気分屋のところはあるが、料理の腕前のすばらしさはもう立証済みだった。召使たちの点でも、自分は断然幸運だ……それともただのめぐりあわせか、と彼は芝生の上を誇らしげに歩きながら、おだやかな氣持で自問した。コネチカット(アメリカの州の名)にいた当時は、土壌に石が多く、芝を荒らす雑草が、取っても取っても取りきれなかったから、ついで芝生らしいものを持ったことがなく、少なくともこんな短く刈り込んだ、ピロードのような庭は思いもよらなかった。この地所を自分のものにしたとき、彼は思いきって二十本あまりの柳の老樹を根こそぎにして、この芝生をつくったのである。

この甘美な芝生を、はなやかな一年草の草花が、帯のようにふちどり、睡蓮の池に通ずる鋪装された小径づたいに走っているが、その池のつややかな睡蓮の葉かげには、金色の鯉がじっと身をひそめていた。山毛櫨まけの木が一本、池をおおい、その向こうに岩をあしらった築山のある日本風の庭園がつづき、マルメロの木や盆栽の楓や、とてもおぼえかねるようなラテン名をもつ小さな植木や

ら灌木やらが、精彩をはなっていた。

芝生のはずれの境界には、リラ、レンギョウ、ガマズミなどの花をつけた灌木が一行に植えられて、それが野菜園を家からかくす役目をつとめていた。つぎに、熟れた果実がたわわに生っている果樹園がつづき——林檎、梨、プラム、それにダムスン、グリーンゲージといった李すももの類が並んでいた。ひまなときに彼は、十七種類もの果樹をかぞえたことがあったが、その上にまだ、離れ家になっている、彼が客用に改造した小さな美しい山荘風の家のまわりの、傾斜地の頂きにたくさん生えているカリンやクルミや、大きなハシバミの木を入れたら、それでもまだ少し種類の足りないことを、彼は自分でも認めていた。

それにまた、植物のうちの最大の宝ともいふべきものを、忘れてはならない。それは大きくてみごとなユダの樹であり、山や湖水や雲を背景の幕として、高く高くそびえていた。それは実に端麗な標本ともいふべく、堂堂と傘状にのびたその枝枝には、春になると芽の出るまえに、どっしりと紫がかった花をいっぱいにつけるのだった。訪問客はみんなこの木に讃嘆をおしまなかつたが、園遊会を催したときなど婦人連に向かつて、大英百科事典で調べたことはおくびにも出さず、自分の知識を披露

するのが彼の楽しみだった。「ええそう」と彼は改まって言うのである。「これはラテン名を *Cercis siliqua* ケルキスシリクワ *strum* ストラム と言つて…… *Legininosae* レギニノサエ アムメ科 の一種としてね……葉がなかなかいい味をもっていますから、東洋ではよくサラダにあえるんですよ。民間に流布しているあのばからしい伝説(イスカリオテのユダが、この木に)は、もちろん、ご存じでしょう。実は、うちにいるお人好しのイタリア人のアルトゥロの奴、おかしいほど迷信ぶかいんで、この木は縁起が悪いなんて言いはりましてね、*l'indaco del conuati* インダコデルコンヴァティ と呼んでいるんです——」ここで彼はニコリ笑つて、上品に翻訳してみせるのだった——「地獄の亡者の木という意味ですが」

しかし、いま彼は、庭番のウィルヘルムが、促成用の胡瓜のフレイムのそばで、花の芽を摘んでいるのを見つけた——この老人は自分では七十代になったと言っているが、実際は少くとも七十九にはなっていた。顔が老齢の聖ペテロそっくりで、騎兵隊の軍曹そのけの頑固者だった。老人の意見というと、これには賛成するにもコツを必要としたが、園芸に関する知識の豊富さと立派な働き手であることは、すでに立証済みであり、ただ一つ欠点といえば、堆肥の山に小便をするという、役に立たないが、困った癖のあることだった。庭番は粗

ラシヤの緑色の前垂れのしわをのびしながら、帽子をとると、いかめしく不愛想な口調でマレーに挨拶した。

「グリユース・ゴット(に)当るドイツ人」

「ディー・ローゼン、ヘア・ヴィルヘルム(バランダがさん)マレーは上手に切り出した。「ヴォルレン・ヴァー・ディーゼ・アンゼーエン(待つてくれんか)」

二人はつれだつて薔薇園へ行つたが、そこでこの老人に好きなように八ツ当たりさせてから、必要な新しい品種の数を、相談のうえで決定した。ウィルヘルムが行つてしまうと、ちよつと気をまぎらすような楽しいことが起こつた。村の棧橋の番人の子供で、七歳と五歳になる二人のちよこまかした姿が、急な坂道をならんで上つてくるところだったが、その息せききつた速力と勿体ぶつた様子には、荷物の送り状を持参に及んだことが見てとれた。年かきのスージーが黄色い封筒をにぎり、弟のハンスが受領証の帳面と鉛筆をもっている。二人とも明るいい目をした、とても愛くるしい子供で、もうニコニコしながら、マレーがいつもくれるご褒美を期待して、すっかり上気しているのだった。だから、その送り状をちらつと見やつてから——送り状は予想どおりフランクフルトからのもので、一九五五年の特級ヨハンニスベルガー(ライン産の白ブドウ酒)が二箱とどいたことを確認してあつた——マ

レーはこわい顔をして首を横にふった。

「こない子たちには、お仕置き^{おしおき}をしてやらなきゃいかん」

マレーが先に立って、子供たちの大好きな木の方へつれて行く間、二人の子供はくつくと笑っていた。それは黄色く熟れたプラムをいっぱいつけている高貴なレーヌ・クロード^{（プラムの一種）}だった。彼が枝をゆさぶると、水気の多いプラムが雨のようにふってきたので、二人はキヤーキヤー笑い声をたてながら、先をあらそって坂をかけおり、ころころ転がって行くその熟れたプラムに、とびかかるのだった。

「ダンケ、ダンケ・フィールマルス、ヘア・マレー！」

^{（ありがと、どうもありがと、マレーおじさん）}

ポケットがいっぱいになってから、彼はやっと子供たちを放免してやった。それから時計に目をやると、出かけることにきめた。

離れの山荘^{（シュタット）}の隣りにあるガレージで、彼はスポーツ・カーのジャガーに乗って行くことにした。すでに五十五という齢にもなり、自分からすすんで悠悠自適の生活に退いている人間にとって、こうした車は、あるいは少しスピードがありすぎて危険かもしれないが、彼のもっている他の二台の車、ハンバーのエステート・ワゴン^{（駅馬車風馬車）}

^{（の箱型自動車）}と新しいロールス・ロイスのシルバー・クラウドが――明らかに彼は英国のマークのあるものの方が気に入っていた――ずっと保守的だっただけに、なおさらそう思われたにちがいない。しかし彼は、齢^{とし}とはとても思えないほど若いと、よく人に言われ言われたが、自分でもそう感じ、また事実そう見えるのだった。からだつきがすらりとしていて、齒も丈夫なうえに、齒並びがよく、髪の毛にはまだ白いものが一筋も見えず、魅力的なその笑顔には、いまもっていかにも人をひきつけるだけの――のびのびと自然な、ほとんど少年の魅力といったものを保っていた。

はじめ、道は牧場の間をぬけて走っていたが、そこにはやさしい目をした茶色の牝牛^{（メウメ）}どもが、のそのそ動いては首につるした大きな鈴を鳴らしていた。これは数世代にわたって伝えられている鈴だった。その下の牧草地では、男に女もまじって、あとからあとから生えてくる草の始末に、多忙をきわめていた。なかには鎌の手をやすめ、片手をあげて挨拶するものもあった。それは彼が子供たちに親切なのが知れわたり、もちろん好かれていたからでもあるが、あるいはまた、村の祭りや寄り合いなどにも興味をもって、なにくれとなく骨を折っていたからかも知れない。事実、田舎の婚礼の最後に、アルベン

ホルン（スイスの牧童が用い、る大きくて長い角笛）の音がもの悲しく鳴るときや、昔からある祭礼や祝賀の行列や、彼の誕生日の夜やつてきて演奏してくれたことのある、下手くそな村のブラス・バンドさえ——みんな彼をよろこばせもし、慰めてもくれたものである。

やがて車は、町の郊外へやってきた。どの通りも、ごしごし洗ったようにきれいで、緑色のシャッターをおろした白壁の家の前庭には、シオンやベゴニアが植えてあり、窓ぎわの植木鉢は、いまをさかりのジェラニウムやペチュニアの花でいっぱいになっていた。こういう花は——彼のついぞ見たことのないものばかりだった。それに、これらすべてにわたり、一切がすっかりととのつて、これを乱すものも決してないかのように——また実際そうだったが——整然たる秩序と能率との清らかで静かな空気がつんでいた——まるで、正直と礼儀と慇懃とが、町の人たちの台言葉であるかのように。彼のような特殊な境遇にあつて——ジャズ気違いや、ビート族、ストリップ・ショー、ロックン・ロール、怒れる若者たちの豪語、モダンアートのばかげた抽象画、その他、狂った世界のあらゆる恐怖と狼狽——現代のこういった俗悪さから逃がれて、ここに居をかまえたことは、どんなに賢明だったろう。

彼の決心に反対をとなえたアメリカの友人たち、とくにスタンフォードの会社を協同で経営していた相棒で、この国とその住民を頭から愚弄しきっていたホルブルックに對して、彼はおだやかな口調で筋道をたて、理由を説いてやったことがあつた。ワーグナー（ドイツの作曲家で近代楽劇の創始者）だつてこの同じスイスの州で、幸福な実り多い七年をすごし、『マイスター・ジンガー』（ワーグナーの作曲した、それに——と、これは笑顔をたたえながら——この土地の消防隊のために、すばらしい行進曲さえつくつてやったではないか。いま博物館となっているその家が、何よりの証拠として残っているのだ。シェリーやキーツやバイロン（初頭の英國の詩人）も、この近くで長いあいだ、ゆうゆうとロマンチックな生活を送つたではないか。それにあの湖水は、ターナー（十九世紀英國の風景画家）が絵にしたし、ルッソー（スイスに生まれた十八世紀フランスの哲学者）は舟を浮かべたし、ラスキン（十九世紀英國の批評家、社会改良を激賞しておかなかつたものだ、と）

それにまた彼は、人気のない全くの真空に、身を埋めようというのではなかった。彼には多くの書籍があり美術品の蒐集もある。そればかりか、土地のスイス人がかりに——どう上手に表現したらいいか——知的な面で刺戟を与えてくれないにしても、メルスブルクには故国を

遁れた人びとの社会があり、それが実に楽しい人たちがかりで、フォン・アルティスホーファー夫人もその一人だが、彼をその一団のメンバーとして迎えてくれているのだ。そして、それでも不充分だというのなら、チューリッヒの空港は車で四十分以内のところにあり、そこから二時間あるいはそれ以下の時間で、パリにも……ミラノにも……ウィーンにも行けて……ティツィアーノ（華麗な色彩をもつて鳴る十六世紀イタリアの画家）の『キリストの埋葬』の豊麗な色彩を見ることも、カラス（現代イタリアの女流歌手）の歌う『トスカ』（近代イタリアの作曲家プッチーニの歌劇）の詠唱をきくことも、ザッヘル・バーですばらしい Schafsgout mit Weiskraut （白キャベツをまぜジュー）を味わうこともできるのだ……。

もうこの時には、ラウアバツハ園芸場についていた。ここで彼は薔薇をえらんだが、ウィルヘルムがよこしたリストに、自分の好きないくつかの変種をも、思いきってつけたした。もつとも、自分で選んだのは、ほかのが育つてみごとに花をつけるのに、どうしてだかみんな枯れてだめになるらしい、といやな予感がないでもなかった。園芸場を出たが、まだ時間は早く、十一時になったばかりだった。そこで彼は、メルスブルクを廻って、少し用をたしてから帰ることにした。

町はいいあんばいに、がらんとしていた。滞在客があ

らかた去った後で、湖畔の遊歩道は、刈り込んだ栗の木から落ち散った枯葉が、すでにかきこそと音をたてて、なかばさびれかかっていた。いまがマレーのいちばん好きな季節で、すべてのものが本来の姿をとりもどすのだと彼には思われた。聖堂の対になった尖塔が、いよいよ鋭く突きささるよう見え、古い砦は、もうまばゆい電光の照明もやらなくなつて、またもとの古色蒼然たる姿にもどり、昔ながらのメルスの橋も、ぽかんと見とれる観光客から解放されて、その本来の姿を静かにとりもどしていた。

彼は広場の噴水のわきへ車をとめると、車に鍵をかけたようにともせず、ぶらぶらと町へ入って行つた。まずタバコ屋に寄つて、上等の紙巻「ソブラニー」の二百本入りを一箱買い、それから薬屋でピノーの「オー・ド・キニン」の大瓶を一本買った。これは彼が常用している特別の養毛剤だった。そのつぎの通りには、有名な菓子屋のマイヤーの店があった。ここで彼は、主人のマイヤーとちよつと立ち話をしてから、ミルク・チョコレートの大箱を買つて、コネチカットにいるホルブルックの子供たちへ送らせた——スタンフォードなんかでは、とてもこんな上等のチョコレートは手に入らない。そこで思いついて——彼は甘党だったから——自分のためにも、新

栗のマロングラッセ（栗の甘露煮に砂糖をまぶしたケーキ）を半キロ包ませた。

ここでの買物はほんとに楽しい、と彼はひとりひそかに思った。どの店へ寄っても、笑顔と懇懇な態度で迎えられるからだった。

そのうち彼は、またいつのまにか、町の広場へ出ていた。潜在意識のようなものにうながされて、自然に足がここへ向いてしまったらしい。ちよつと後ろめたい気もしたが、思わず微笑せずにはいられなかった。すぐ向かい側にロイシュナー画廊があるからだった。自分が誘惑に負けかけているのをユーモラスに意識しながら、ふとためらいを感じた。しかし、ヴェイヤール（現代のフランス庭生活のシーンを感情をこめて描く）のバステル画のことを思うと、矢もたてもたまらなかつたのだ。彼は通りを横ぎり、画廊のドアを押しあけて、なかへ入った。

ロイシュナーは帳場で、フオリオ判のペン画のスケッチを眺めていた。画廊はでっぶり太った、艶のいい、いつも笑顔を欠かさない小男で、モーニングに縞ズボン、真珠のネクタイピンと、身なりには大のやかましやだった。彼はマレーにうやうやしく挨拶をしたが、しかし商人らしい様子は全然なく、自分がこの画廊にきているのは、ほんの偶然にすぎないのだといった、さりげなさをみせていた。二人は時候の話などをした。

「これはとてもいいものでございますよ」時候の話が一段落すると、早速ロイシュナーはそのフオリオ判を指しながら話した。「それに手頃でしてな。カンディンスキー（ロシア生まれの画家で、はじめ印象派に）はあんまり低く評価されていましてね」

マレーはカンディンスキーの絵のひよる長い人物や、猿のような顔には少しも興味がなかったが、画廊もそのことは百も承知の癖にと思ひながら、それでも二人してそれから十五分ほど、その何枚かの素描を見たり賞めたりしていた。それからマレーは、帽子をとりあげた。

「ついでにだけど」マレーはさりげない調子で言った。「あの小さなヴェイヤールね、先週ちよつと見せてくれたやつ、あれはまだお宅にある？」

「あることはありますけど」と画廊はとたんに真顔になった。「アメリカの蒐集家のかたが、とてもご執心です」

「なにをくだらない」とマレーは軽くそれをうけた。「アメリカ人なんて、メルスブルクにはもう一人もいないじゃないか」

「そのアメリカさんは、フィラデルフィアのかたですてね……美術館の館長さんなんです。なんなら、そのかたから参った電報を、ごらんに入れまじょうか」